

【仏門】

須永の朝鮮行についてはまだ書き足りませんが、今回はいったんそこから離れ、前回触れた明治38年（1905）の『須永元日記』に戻りたいと思います。

第二次日韓協約について、11月19日の記述では須永が朴泳孝の気持ちを慮って涙を流したのです。

これには前段階がありました。

1か月近く前になりますが、10月21日に朴泳孝の招きを受けた須永は酒樓で友人の望月龍太郎を交え、日韓協約を巡る両国の交渉などについて語り合いました。望月は日韓合邦運動を展開した韓国の団体「一進会」と関りが深く、日韓併合にも関与したと言われます。

当日の日記にこうあります。

「泳孝、談時事、意気不昂。冠（コウ□リ）酒、大酔、如不知世事者。只暗示帰依仏門之意。」

書き下しも書いておきましょう。

「泳孝、時事を談じ、意気昂がらず。酒をかうむり、大いに酔ひ、世事を知らざる者の如し。只だ仏門に帰依するの意を暗示す。」

朴泳孝はいつもの元気がなく、酒に大酔し、仏門に入りたいとまでほのめかす始末でした。韓国が日本の保護国になることが受け入れられなかったのです。

望月はこの後、外務省高官との酒宴に出るため中座しましたが、須永と朴泳孝はさらに盃を重ね、須永は飲めない酒に酔いつぶれました。

【韓山楼】

この年7月23日の記述には「韓山楼」という朝鮮料理屋が出てきます。

「金英鎮来訪。誘余韓山楼、饗朝鮮料理。」

金英鎮は金玉均の養子で、当時日本にいました。

韓山楼は東京の上野広小路にあった朝鮮料理屋です。李建志「朝鮮料理「韓山楼」主人・李人植—日本最初の朝鮮料理屋の思想と属性—」（『京都ノートルダム女子大学研究紀要』第32号、2002）に詳しいのですが、明治38年7月8日の『都新聞』に韓山楼の広告が掲載されました。この広告では「李人植」と名前の最後の字が違ってきます。

李人植は、『血の涙』という小説の作者として有名で、波田野節子さんの翻訳が最近、光文社古典新訳文庫から刊行されたので、ご存知の方も多いのではないのでしょうか。文庫の帯には「「朝鮮最初の小説家」が描く、さながら韓ドラの数奇な運命」「韓国の受験生ならタイトルぐらいは暗記している」とあります。

韓山楼はこの後もしばしば出てきます。11月26日の記述を紹介します。

「訪黄鉄中根岸僑居。黄鉄誘韓山楼、饗朝飯。相俱訪朴泳孝、談以禹範善大祥忌法会宮於小石川戸崎町喜運寺、期以二十八日也。」

黄鉄は「黄鉄」とも書き、前回触れた池雲英と親しく、やはり朝鮮における写真術導入の先駆者です。この当時は日本に亡命していましたが、その後、帰国して江原道や慶尚南道の観察使を務めるなどしました。日韓併合後は官界から退き、日本で画家として活動しました。須永とも親しく、書くべきことが多いのですが、詳しくは別の機会に回します。

中根岸は台東区の旧町名で、周辺には現在「子規庵」や「書道博物館」などがあります。

【禹範善、長春父子】

予定通り、11月28日に禹範善の法会が小石川の喜運寺で営まれました。禹範善（1857～1903）は朝鮮の軍人でしたが、明成皇后殺害に関与したとして日本に亡命し、明治35年11月24日、朝鮮からの刺客に暗殺されました。墓が終焉の地の広島県呉市と佐野市にあります。大祥忌は三回忌に行う法要です。当日の日記にこうあります。

「会禹範善法会於喜運寺。来会者朴泳孝・趙義淵・趙重応・黄鉄・李圭完・韓錫露・権東鎮・恒屋盛服及余也。範善長子長春出接。範善倒毒手也。寺僧磯貝某、憐之、養長春…齡八歳、入小学、与他雛僧同誦經文、列法会也。会散後、黄鉄誘李圭完及余韓山樓饗焉。」

範善長子長春とあるのは、禹範善が日本人女性との間にもうけた禹長春（189

8～1959) です。

父親の死後、須永の親族の養子となり、「須永長春」と名乗った時期もありました。長じて世界的に知られる育種学者となり、1950年、李承晩大統領に招かれて食糧難の韓国に渡り、韓国農業の発展に尽くしました。死後、社会葬で送られ、今も韓国ではよく知られた存在だそうです。角田房子さんの『わが祖国一禹博士の運命の種一』（新潮文庫、1994）は禹長春の評伝です。

日記に寺僧磯貝某とあるのは、喜運寺の住職、磯貝寰山（1876～1955）と思われます。

『群馬県人名大事典』（上毛新聞社、1982）によると、磯貝は1896年に喜運寺の住職になりました。

磯貝の前の住職は新井慈剛といい、葛生能久『東亜先覚志士記伝 下巻』（黒龍会出版部、1936）によると、禹範善は黄鉄に、新婦は新井慈剛に、それぞれ仲人を依頼したということです。

【前回の口は無か】

前回、明治38年11月19日の日記に触れたところで、一文字読めない字がありました。

第二次日韓協約に絡み、「余为我国欣之、為朴泳孝不能□一掬之涙也。噫。」としましたが、読めなかった□の部分は、「無」と思われます。ただ、前回触れたよ

うに意味は「止」の方が通じます。今後も検討を続けたいと思います。

2024年8月6日 広沢有久、9月5日修正

【修正】禹長春の件で須永との関係について「親族の」が抜けていたので修正しました。

なお、『わが祖国一禹博士の運命の種一』には、禹長春が次女昌子に語ったという以下の記述があります。

「(父が) 結婚する時は須永さんが、将来生まれるであろう子供たちのことを考え、夫婦養子にして須永という日本名を名乗れるようにしてくれた」

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko>